

Our Library

図書館であなたの一冊を探しませんか

CONTENTS

②-③

読書の秋・あのひとの一冊

上橋菜穂子

島田昭彦

長谷基弘

④

読書ナビ
おしえてライブラリー
INFORMATION

読書ナビ

第24回

スポーツを読む コミュニティ福祉学部教授・沼澤秀雄

『イエローサブマリン』
(山際淳司著 小学館、1998年〈小学館文庫〉)

『スローカーブをもう一球』
(山際淳司著 角川書店、1985年〈角川文庫〉)

『テニスボーイの憂鬱 上-下』
(村上龍著 集英社、2007年〈集英社文庫〉)

『優駿』
(宮本輝著 新潮社；宮本輝全集第7巻、1992年)

『一瞬の風になれ 上-中-下』
(佐藤多佳子著 講談社、2006年)

『一瞬の夏 上-下』
(沢木耕太郎著 新潮社、1981年)

『凍』
(沢木耕太郎著 新潮社、2005年)

『果てなき渴望』
(増田晶文著 草思社、2000年)

『ただマイヨ・ジョーヌのためでなく』
(ランス・アームストロング著 講談社、2000年)

『スポーツ解体新書』
(玉木正之著 朝日新聞社、2006年)

『スポーツマンシップを考える』
(広瀬一郎著 小学館；増補・改訂版、2005年)

この原稿を、北京オリンピックを観ながら書いている。大会直前に起きたチベットの暴動、四川省の震災、それに厳戒態勢の聖火リレーなど、本当に中国で開催して大丈夫だろうかと思っていた。しかし、不思議なことに北京から遠く離れた貧しい農村の民衆も、直前の大地震で家をなくした被災者も、オリンピックどころではないといながら、この大会の開催を非難したりしない。むしろ自国の選手を応援したいというのだ。なぜオリンピックというスポーツの祭典は人々を魅了するのだろうか。我々はスポーツを観るとき、国の名誉を背負って勝負するアスリートに自分の人生を重ね合わせ、共感と希望を与えられ、将来を前向きに捉えるようになる。スポーツはその人の人生を豊かにしてくれるツールと成りえる。しかし、施設、社会的な環境、競技者人口の増加など、様々な条件が整わないとスポーツを楽しめる社会は成熟しない。そして何より国の平和が保たれていなければならない。ギリシャで行われていた古代オリンピックは、隣国との戦いを休止してでも開催されたという。今大会後の中国から、スポーツの名作がたくさん生まれてくるようにと願わずにはいられない。

今回紹介する9作品は、著名な小説家の様々なスポーツを題材にした代表作で、そのうち4作品はノンフィクションである。また、残りの2冊は現代のスポーツを理解するための指南書といってもよいものである。

新座キャンパスにスポーツウエルネス学科が創設されたが、この学科の学生達には、健康の保持増進、身体のメカニズム、トレーニング科学などは勿論のこと、スポーツによる人間性の涵養についても学んでほしい。それにはスポーツを経験することによる身体感覚の積み重ねと、文献による情報収集が必要だろう。そして、スポーツの名著に刻まれた圧倒的な言葉の力をたくさん感じてほしい。

※上記の資料はすべて立教大学図書館で所蔵しています。

おしえてライブラリー

第3回

図書館のパソコンで、
OPAC検索以外のことはできますか…？

図書館の中には、OPAC検索用のパソコンと、その他の情報検索用のパソコンとがあります。OPAC検索用のパソコンは全館に設置されており、その他の情報検索用のパソコンは、図書館本館、メディアライブラリー、人文科学系図書館、社会科学系図書館、新座図書館に設置されています。情報検索用のパソコンでは、OPAC検索以外に、立教大学図書館が契約しているオンラインデータベース、オンラインジャーナルなどインターネットを利用した情報検索ができますし、ワードやエクセルなどを使うこともできます。



図書館本館3階の増設したパソコン

図書館本館……………16台
メディアライブラリー…37台
人文科学系図書館………… 2台
社会科学系図書館………… 7台
新座図書館……………29台

(2008年10月現在)

INFORMATION

「図書館活用講座」のご案内

図書館では、皆さんの学習の一助となる講座(全4回シリーズ)をこの秋も開催します。参加者は、受講段階に応じて、図書館オリジナルグッズがもらえたり、図書館本館書庫への入庫や講習会室の利用ができるようになります。

「図書館活用講座」では、図書館での本や雑誌の探し方から、レポート・論文を作成する際の注意点までを全4回に分け、情報収集のテクニックを段階的に学ぶことができます。

《講習の種類》

- ① OPAC講習会(本の探し方)
- ② 雑誌記事論文検索講習会
- ③ 新聞記事等データベース講習会
- ④ レポート論文作成・著作権理解

※講習の内容は、6月～7月実施のものと同様です。

実施：10月～11月

各講座の開催スケジュールは以下のカウンターでご確認ください。

問合せ：図書館本館参考カウンター
新座図書館カウンター

Your Library 第3号(通号62)

発行日 2008年10月10日 連絡先 TEL 03-3985-2628
編集 川崎 修(図書館副館長) E-mail your_library@ml.rikkyo.ac.jp
発行人 石川 巧(図書館長)
発行 立教大学図書館
http://opac.rikkyo.ac.jp/



メールにて、みなさんのご意見、ご感想をぜひお寄せください。

読書の秋にちなみ、著名な校友の方々にご寄稿をいただきました。本当にお忙しい方々ですが、快くお受けいただきましたこと、改めましてここに御礼申し上げます。みなさんには、この機会にぜひ人生で大切な一冊を見つけてほしいと、切に願っています。

読書の秋

—あのひとの一冊—

「灯火親しむべし」という言葉をご存じですか？ 中国唐代の詩人、韓愈（かんゆ）の詩の一節にあり、「涼しく夜の長い秋は、灯火の下での読書に適している」という意味の、「読書の秋」の由来にもなっている言葉です。

今回は「読書の秋」にちなんで、各界でご活躍されている立教大学の卒業生3名の方々に、学生時代に読んでほしい本をご紹介します。

この秋に出会う一冊がみなさんの人生のなかで、どのような一冊になるのでしょうか。まずは手にとってみませんか。

『忘れられた日本人』

う え は し な お こ
上橋菜穂子

作家／川村学園女子大学准教授

照りつける太陽の強烈な光が、ごつごつとした石垣の塀の影をくっきりと道に落としている、その影の中を歩きながら、ふと心に浮かんだ思いを、二十数年も経った今も、ときおり、思い出すことがある。

それは、「人の暮しというのは、こういうものののだ」という静かな思いだった。働いて、昼寝をし、夕食を食べながら、なんだかんだと家族としゃべり、また働く。その繰り返しが続いていく日々を、「それで良いのだ」と、そのとき私は、はじめて感じたのだ。

当時私は、立教大学の大学院の学生だった。修士論文を書くために、沖縄の宮古島でひとり調査をしていた頃——自分は、いずれ、何者かに成れるのだろうか——という思いを、常に心に持っていた頃のことだ。

「何者か」に成りたいという思いは、他の誰とも違う何かを生みだす者に成りたいとい

う、とても傲慢な欲求から発した思いだったのだけれど、一方でそれは、そうでなければ（そういう人間に成らなければ）生まれてきた価値がないという、強迫観念にも似た切実な思いでもあった。

その思いがあったからこそ、私は作家に成れたのかもしれない。しかし、そういう思いは、時に私を息苦しくさせ、追いつめた。

膨れ上がった風船のような状態から、ずっと息を抜き、目の前に清々とした風景を見せてくれた、宮古島での経験と、とてもよく似た感慨を抱かせてくれた本がある。それが宮本常一の書いた『忘れられた日本人』だった。なかでも「私の祖父」は、読み終えた瞬間、ぼろぼろと涙がでた。

興味が湧いたら、ぜひ読んでみて欲しい。私と同じ感覚を抱くかどうかは、わからないけれど。



立教大学大学院博士課程単位取得退学（文学博士）。専攻は文化人類学。作家／川村学園女子大学准教授。著書は『精霊の守り人』をはじめとする『守り人シリーズ』、『狐笛のかなた』『獣の奏者』等。野間児童文芸賞他数々の文学賞を受賞。北米、フランス、ドイツなどへの翻訳出版も開始されている。

ご紹介の本 『忘れられた日本人』 宮本常一著 岩波書店、1984年（岩波文庫）

オモシロい人生にするための4つの要素

しま だ あき ひこ
島田昭彦

株式会社クリップ代表取締役社長



人、モノ、コト、文化を融合する、(株)クリップ代表取締役社長。京都市中京区に生まれる。立教大学を経て、スポーツ総合誌『Number』の編集に10年間携わる。訪問国は50カ国。編集の傍ら、「from KYOTO」として、2002年より、京都のよきものを全国、世界に発信。2005年、総合企画会社(株)クリップ設立。京都の伝統とモダンを融合し数々の伝統産業を再生。モノづくりから、カフェ、地域活性化まで、取り組み領域は幅広い。最近では、烏丸三条のサントリー伊右衛門茶のカフェ、IYEMON SALON KYOTO など、ヒットの仕掛け人。

みなさん、こんにちは。1987年3月に社会学部を卒業した、島田昭彦です。スポーツ総合雑誌『Number』の編集を経て、今は、人、モノ、コト、文化をクリップして、ビジネスをデザインする会社、『クリップ』の代表を務めています。

僕が、みなさんに、お伝えしたい、キーワードは、4つ。『好奇心』『フットワーク』『現場100回』『人脈』——。

僕の大学生活は、旅の連続でした。ある日、友人から教わった、「アントニオ・ガウディ」という建築家の名前。図書館で、調べるとそれは、スペインの天才建築家。常識を超えたスケールの教会や、集合住宅を作っているらしい。

調べれば調べるほど、興味が湧いてきて、ついには、彼の建築物をこの目で、見てみたい。そんな気持ちが高じて、3年終了時の春休み、スペイン・バルセロナに出発したのです。現場で、ナマで見た、ガウディの代表的な建築物、「サグラダ・ファミリア教会」は、デカイこと、デカイこと。その大きさとデザインの奇抜さに、度肝を抜かれたことを、憶えています。

ご紹介の本 『建築を語る』 安藤忠雄著 東京大学出版会、1996年

書を捨てよと言う人の書にはまった

は せ も と ひ ろ
長谷基弘

劇作家・演出家・日本劇作家協会常務理事

かなり小さかった頃から「本」というものが大好きです。

幼い頃から今に至るまでの、私の読書スタイルは次の二つ。片っ端から読む、何度でも繰り返し読む、です。

前者は、文字通りの意味。気に入った作家の作品をすべて読んだり、ある本の「参考文献」にあるものを図書館などで探し、可能な全部読んでみたりするのが好きです。うーんちょっと病的かも。でも、ある事象について語っている本を何種類も読むと、本によって書いてあることが違っていることに気付いて「おや？」と思ったりします。そうなればしめたもの。その事象に対する「自分の視点」が構築されてきた証拠ですから。

後者は、気に入った本や、気に入った箇所を繰り返して読むという程度の意味です。戯曲や小説の好きな場面は何度も味わいたいですし、評論や専門書などは一回読んだくらいでは理解し身につけることができないので。

ご紹介の本 『書を捨てよ、町へ出よう』 寺山修司著 角川書店、2004年（角川文庫）



立教大学在学中に劇団桃唄309を結成。以降現在まで、同劇団の劇作・演出をつとめる。重厚な物語づくりと緻密な演出により、幅広い年代層の顧客から支持を受ける。2000年には文化庁派遣芸術家在外研修員として渡米。ミネソタ州ミネアポリスのプレイライツセンターにて、同センターの活動を研修した。高校や大学などで、演劇・朗読・劇作の非常勤講師もつとめ、自治体・官庁・企業などのワークショップ講師経験も多い。

劇団ウェブサイト: www.momouta.org

（ご紹介いただいた本は、立教大学図書館で所蔵しています。）